
妹の日記

宝月藍

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹の日記

【Nコード】

N9434D

【作者名】

宝月藍

【あらすじ】

日記、妹、暗号のキーワード。それを解こうとする、主人公とその仲間たちのミステリー。（どちらかというと、コメディ）

プロローグ

プロローグ

「お兄ちゃん見ないで！」

妹が俺の手から日記帳を取り上げる。妹のツインテールの髪が揺れる。

「あたしの日記なんだよ！」

その通りだ。でも、この日記帳をあげたのは俺だ。2ヶ月前に誕生日プレゼントとしてあげたものだ。書いてるかなあ　　と思つて、見ようと思つた瞬間、妹に取り上げられた。ある意味グッドタイミング。

「『ぶらいばしい』の侵害だよー。」

とはいつても、とにかく中は見えていない。

ん？プライバシーの侵害ってことは、書いているという事だろうか。いや、書いていないから見せられないということだろうか。

どうなんだろう。　　うー　　解らん。

「お兄ちゃん、おやつ残しといてね。」

そう言つて妹は、家を飛び出した。

ちなみに今日のおやつは、シュークリームだ。

アレから2、3時間後の事だ。妹は、汗をびつちやりかいて、帰ってきた。ことなくそ暑い日に、どこで遊んできたんだろう。

「ほひいはん、ほふふはんひょうひはほひ。」

妹がシュークリームを食べながら言う。しかし残念な事に俺は、はひほ星人の言葉がわからない。

「食つてからしゃべってくれ。」

俺がそう言つと、妹はがくがくとうなずいた。そして食い終わると、りんごジュースをコップに入れた。そして、風呂上りのおっさんの

ごとく、一気飲みする。

「お兄ちゃん、もうすぐ誕生日だよね。」

「あ、そうだな。」

俺の誕生日は、8月21日だ。ついでに今日は、8月12日だ。

「これ、お兄ちゃんの誕生日プレゼントのかくし場所を書いた、暗号だよ。解いて探してね。解けなかったら、ずっともらえないよ。あつ！もう4時だ！由衣ちゃんと遊ぶ約束してたんだつた。じゃあね。いつてきまーす。」

妹は家を出て行った。

そのときの俺は、暗号とやらを解く気は一切無かつた。どうせ妹のことだから、誕生日が来たら、答えを教えるだろうと思っていた。しかし答えは、一生聞けないこととなる。

妹、松原蘭11歳。8月12日4時6分に、居眠り運転の車に轢かれ、死す。

1 外周

1 外周

「ねえ、君かわいいね。お兄さんたちとお茶しない？」

後ろから、声をかけられた。ふりむくと、20歳位の男の人3人が居た。

「いいです。遠慮します。いそいでますから」

いまは、外周の最中だ。今は、本音だ。

「いいじゃん。走ったから疲れてるでしょ」

肩をつかまれた。凄い力だ。振りほどけない。

「やめなよー。君たち。」

空気を読んでない、のんきな声がした。

「だれだよ。」

同感だ。この人たちに同感です。

「きみたちも、誘うなら相手を考えようよ。」

「は？」

「まあ、男に興味があるならべつだけど。」

「どういう意味だよ」

「や、その子男だよ。」

俺の肩をつかんでいた人の手が離れる。

女だと思ってたのか。まあ、珍しい事でもないけど。

「キシヨッ」

そういつて男3人は去っていった。

キシヨイのは、おまえらだろ。

あ、俺は、松原誠^{まつばら まこと}。高一。卓球部に入っている。見た目は10人見て、少なくとも6人は女だと思っくらい、女っぽい。その原因は、おおきく3つある。

1つ目は、身長。俺の身長は、高一の男とは思えない、145cm

だ。たまに病気じゃないかと思うくらいだ。でも、体に異常は無い。
(ちなみに、体重は、30kg)

2つ目は、声だ。中学校のときの合唱コンクールでは、男子で一人だけアルト(女声の、低いほう)に振り分けられた。いまだに、声は高いままだ。

3つ目は、髪型だ。これは何とかかなりそうなもんだが、これがなかなかなんだ。先輩に、髪をそれ以上切ったりしたら殺すと言われた。多分、男子卓球部と、女子卓球部が、男子第二体育館、女子第一体育館で練習しているからだと思う。それも、むさ苦しい男子体操部との練習だから余計だろう。とにかく、見た目を女っぽくしろということらしい。いまの髪の長さは、肩につかない程度のショートだ。「だいじょうぶかい?」

妖怪! ? と、おもったらさつき変態を追い払った男の人だ。

、でかいな。2mくらいに見える。(実際は、180cmくらいだと思う)

「ありがとうございます。大丈夫です」

俺がその場を去ろうとした時だった。

「誠、待ってよ」

「え?」

どうして名前を。

「まだ気付かないのかい?」

「何が?」

「僕の事だよ」

俺は、顔をしかめる。

「武だよ。まっばらたけし松原武」

「もしかして、タケ兄?」

「正解」

タケ兄(以下の文は、兄ちゃん)は、俺が3歳の時に、中学から高校までエスカレーター式、全寮制の学校に行って、それ以来、まともな話してないような気がする。

「とりあえず、あとでね。外周の途中だから」

「分かった。」

俺は、兄ちゃんの返事を聞く前に、走り出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9434d/>

妹の日記

2011年1月14日04時10分発行